

自己調整システムにおける自己評価の役割 I

—自己評価基準の設定に関して—

石 田 勢 津 子*

I 問 題

自己強化 (Self-reinforcement : 以下 SR と略す) の機能に関するこれまでの諸研究から, SR は, 直接強化やモデリングに匹敵するほどの反応維持機能をもつことが明らかにされている。

また, Kanfer (1971) は, SR に関する一連の研究から, 自己調整 (Self-regulation) システムのモデルを提出している。このシステムは, 自己観察 (Self-monitoring : 課題に対する自己の反応, 過去経験等について判断), 自己評価 (Self-evaluation : 自己の遂行と, 遂行水準に対する個人的基準や社会的基準の比較過程), SR (強化の自己施行) という 1 つのフィードバック機構をなしているとしている。

Bandura (1977) も, 自己制御 (Self-control) システムとして, ほぼ同様のモデルを示している。これは, 遂行行動 (自己の反応に対する絶対的評価), 判断過程 (絶対的評価と課題に対する個人的基準や社会的基準との比較), 自己反応 (自己評価的反応, 自己強化) を設定している。

この両システムの各 3 過程は, ほぼ対応するものと考えられる。ただ Kanfer では, 第 2 過程が自己評価過程, Bandura では, 第 3 過程が自己評価的反応となっているが, これは, 自己の反応 (行動) に対する何らかの表出反応として, 自己評価を捉えるかどうかの問題であるといえる。Kanfer においては, 自己評価を内潜在的なものとして捉え, その結果が SR 施行への刺激となるとしており, Bandura は, 自己評価の結果を表出的に行なうことも SR と同様の機能をもつとしている。この相違は, SR, すなわち, “自分自身で強化刺激を管理し施行すること” についての, 具体的, 実体的な強化刺激の有・無の有効性に関する問題を含んでいる。この点に関して, 塩田 (1980) は, 自己評価反応を行なっただけでも, SR と同様の機能をもつことを示唆している。

しかし, この相違はともかく, SR 機能あるいは, 自

己評価を含む自己反応の機能を検討する上で, 最も重要なことは, 課題に対する自己の反応と, 個人的基準ないしは社会的基準との判断・比較過程であろう。この判断基準がどのように設定されるかが, その後の自己評価あるいは SR の施行を規定しているといえる。

この自己評価基準 (以後, Kanfer の自己評価過程, Bandura の判断過程での判断・比較基準を自己評価基準と呼ぶ) の設定に関する従来の研究は, 課題による外的情報量の差異を問題にしたものが多い。そこでの主な研究結果は次のようである。

- 1) 正反応についての客観的な基準が不明確な課題ほど, 他者の反応についての情報が SR 反応の生起に及ぼす影響は大きい (Marston, 1964 b; Read, 1973)。
- 2) 課題遂行の意味づけによって SR 反応の頻度は異なる (Masters & Pisarowicz, 1975)。
- 3) 課題の困難度が増すほど SR 反応は増加する (Molho, 1973)。

これらの研究から, 課題の性質によって自己評価基準が異なることは明らかであるが, しかし, どのような手がかりによってこの基準が設定されているかについては, 具体的に示されていない。この基準設定に際して, どのような情報が必要, 有効であるかを知ることによって通常の学習事態において, SR あるいは自己評価反応をより効果的に用いることができるであろう。

本研究では, まず, 自己評価を行なう際にどのような基準・手がかりが用いられるか, さらに, 課題の性質によってどのように異なるかについて検討する。

その際, 課題として, 1) 客観的基準が不明確なもの (解答数を限定せず, 時間のみを制限したもの: 課題 I), 2) 客観的基準が明確なもの (解答数, 時間を制限: 課題 II), の 2 種を用いて比較する。

II 方 法

被験者 県内女子短大生 246 名 このうち, 課題 I は 114 名, 課題 II は 132 名である。

課題及び条件 課題は I, II とも「しん」と発音する漢字を書くというものである。教示によって 2 条件を設

* 日本学術振興会奨励研究員

表 1 自己評価基準の設定理由についての選択肢内容

| 理由番号 | 内 容 | 選 択 肢 |
|------|----------------|-----------------------|
| 1 | 他 の 人 と の 比 較 | 他の人がいくつできたかの予想と比較して |
| 2 | 自 分 の 知 識 量 | 漢字について自分が知っている量から判断して |
| 3 | 一 生 懸 命 の 努 力 | 一生懸命やったかどうかから判断して |
| 4 | 最 初 の 予 想 | 自分で最初に書けるといった数から判断して |
| 5 * | 10分間の範囲 (課題 I) | 10分間で書ける数から判断して |
| 5 * | 25個と比較 (課題 II) | 25個のうちいくつできたか比較して |
| 6 | そ の 他 | (自由記述) |

* 理由 5 は課題によって異なっている

定する。具体的教示は以下のとおりである。

課題 I : 「しん」と発音する漢字をできるだけたくさん書いて下さい。制限時間は10分です。

課題 II : 「しん」と発音する漢字を25個, 下の欄に書き入れて下さい。制限時間は10分です。

自己評価反応の測定 各課題条件とも終了後、自分で今の問題がどのくらいできたと思うか、「よくできた」、「まあまあできた」、「ふつう」、「あまりよくできなかった」、「できなかった」の5段階によって評定する。

自己評価基準の設定理由の選択 自己評価の判断理由(根拠)について、大学生6名による調査結果から、予め作成した選択肢の中から選ぶ(複数選択可能)というものである。具体的な内容及び選択肢は表1のとおりである

他者の得点予想 他の人が平均いくつぐらい書いたと思うかを記入させる。

手続き 調査は、各課題ごとに、集団で実施された。

III 結 果

1. 自己評価, 解答数, 他者の得点予想についての分析

(1) 自己評価反応について

「よくできた」、「まあまあできた」、「ふつう」、「あま

りできなかった」、「できなかった」, に対してそれぞれ5点, 4点, 3点, 2点, 1点を与え得点化する。

課題 I の平均評価点は2.03 (SD = 0.79), 課題 II では2.13 (SD = 0.86) と, 両課題とも平均は2点と低く条件間に差はみられない。また, 各評価点への分布の割合を表2に示す。課題 II で2名のみ評価点5点の者がみられるが, 全体的な分布に大きな差はみられない。

(2) 解答数について

各課題における平均解答数及び自己評価点別の平均解答数は表3に示したとおりである。全体的にみると課題条件間に差はみられない。

自己評価点別にみれば, 自己評価点が1点の者については, 課題 I の得点が課題 II よりも有意に高くなっている ($t = 2.07, df = 53, p < .05$)。しかし, 自己評価点が2点以上の場合には反対に課題 II の方が高くなっており, とくに, 評価3点の者は有意に高い ($t = 3.37, df = 39, p < .01$)。

次に, 各課題ごとの自己評価点による解答数を比較したところ, 課題 I, II ともに有意な差がみられ (課題 I : $F = 3.39, df = 3, p < .02$, 課題 II : $F = 22.05, df = 4, p < .001$), 自己評価によって解答数が顕著に異なることを示している。

(3) 他者の得点予想について

課題による他者の得点予想点の平均及び自己評価点別の平均点を表4に示す。

全体的にみると, 課題 I の方が課題 II よりも他者の得点を高く予想する傾向がみられる ($t = 1.87, df = 244, p < .06$)。自己評価点別に比較すると, 評価点3点の者をのぞいて課題 I の方が高くなっており, とくに評価1点の者は有意に高い ($t = 2.95, df = 53, p < .01$)。

ここで, この他者の得点予想点と実際の解答数との差をとると, 表5のようになる。全体的にみると, やはり

表 2 各自己評価点への分布の割合

| 自 己 評 価 点 | 課 題 I | 課 題 II |
|--------------|------------|------------|
| | 人 数 (%) | 人 数 (%) |
| 1 | 28 (24.56) | 27 (20.45) |
| 2 | 61 (53.51) | 73 (55.30) |
| 3 | 19 (16.67) | 22 (16.67) |
| 4 | 6 (5.26) | 8 (6.06) |
| 5 | 0 | 2 (1.52) |
| 全 体 | 114 | 132 |

表 3 各課題での自己評価点ごとの平均解答数

| 自己 評価点 | 課 題 I | | | 課 題 II | | |
|-----------|-------|-------|--------|--------|-------|--------|
| | N | Mean | (SD) | N | Mean | (SD) |
| 1 | 28 | 10.46 | (2.06) | 27 | 9.19 | (2.40) |
| 2 | 61 | 11.74 | (2.64) | 73 | 12.10 | (2.28) |
| 3 | 19 | 11.37 | (2.06) | 22 | 13.77 | (2.35) |
| 4 | 6 | 13.50 | (1.64) | 8 | 14.63 | (2.67) |
| 5 | 0 | — | | 2 | 20.50 | (2.12) |
| 全 体 | 114 | 11.46 | (2.45) | 132 | 12.07 | (3.00) |

表 4 各課題での自己評価点ごとの他人の得点予想点

| 自己 評価点 | 課 題 I | | | 課 題 II | | |
|-----------|-------|-------|--------|--------|-------|--------|
| | N | Mean | (SD) | N | Mean | (SD) |
| 1 | 28 | 17.79 | (4.92) | 27 | 14.56 | (2.69) |
| 2 | 61 | 16.36 | (4.36) | 73 | 15.99 | (2.80) |
| 3 | 19 | 13.05 | (3.76) | 22 | 13.68 | (3.17) |
| 4 | 6 | 14.17 | (2.79) | 8 | 12.68 | (2.56) |
| 5 | 0 | — | | 2 | 18.50 | (2.12) |
| 全 体 | 114 | 16.04 | (4.58) | 132 | 15.13 | (3.04) |

表 5 各課題での他人の得点予想点と解答数との差得点

| 自己 評価点 | 課 題 I | | | 課 題 II | | |
|-----------|-------|------|--------|--------|-------|--------|
| | N | Mean | (SD) | N | Mean | (SD) |
| 1 | 28 | 7.32 | (4.68) | 27 | 5.37 | (2.32) |
| 2 | 61 | 4.62 | (3.33) | 73 | 3.82 | (2.41) |
| 3 | 19 | 1.68 | (3.62) | 22 | -0.09 | (3.16) |
| 4 | 6 | 0.67 | (2.80) | 8 | -2.25 | (1.58) |
| 5 | 0 | — | | 2 | -2.00 | (4.24) |
| 全 体 | 114 | 4.59 | (3.73) | 132 | 3.02 | (2.52) |

表 6 課題 I における各変数間の相関係数

| 変 数 | 自己評価点 | 解 答 数 | 他者の予想点 |
|--------|--------|-------|--------|
| 自己評価点 | | | |
| 解答数 | .23* | | |
| 他者の予想点 | -.31** | .42** | |

* p < .007 ** p < .001

自己調整システムにおける自己評価の役割 I

表 7 課題 II における各変数間の相関係数

| 変数 | 自己評価点 | 解答数 | 他者の予想点 |
|--------|-------|-------|--------|
| 自己評価点 | | | |
| 解答数 | .61** | | |
| 他者の予想点 | -.12 | .37** | |

** p < .001

課題 I の方が有意に差得点が大きく ($t=3.90, df=244, p<.01$), 他者の得点を高く予想しているといえる。自己評価点別にみると, 課題 II では, 自己評価 3, 4 点の者は, 他者の得点の方を自分の実際の解答数より低く予想しているが, 一方, 課題 I では, 他者の得点の方がわずかではあるが高いと予想している。

(4) 各変数間の関連性について

自己評価点, 解答数及び他者の得点予想点の 3 つの変数間の相関係数 (Pearson の積率相関による) を表 6, 表 7 に示す。

表 6 より課題 I においては, 自己評価点と解答数 ($r=.23, p<.007$), 及び他者の得点予想点 ($r=-.31, p<.001$) とともに有意な相関が認められる。一方, 表 7

をみると課題 II では, 自己評価点と解答数は有意な相関がみられるが ($r=.61, p<.001$), 他者の得点予想点との相関は有意ではない。また, 解答数と他者の得点予想点については, 両課題ともに有意な相関がみられる (ともに $p<.001$)。

2. 自己評価基準の設定理由の分析

(1) 課題間の全体的比較

自己評価の判断理由について, 両課題において選択された理由の割合を図 1 に示す (但し, 理由 5 については, 課題によって選択肢の内容が異なる)。

課題 I では, 選択理由として最も多いのは, 「自分の知識量」から判断する場合で, 全体の 46.5% となっている。次に多いのは, 「他の人との比較」に依るとするも

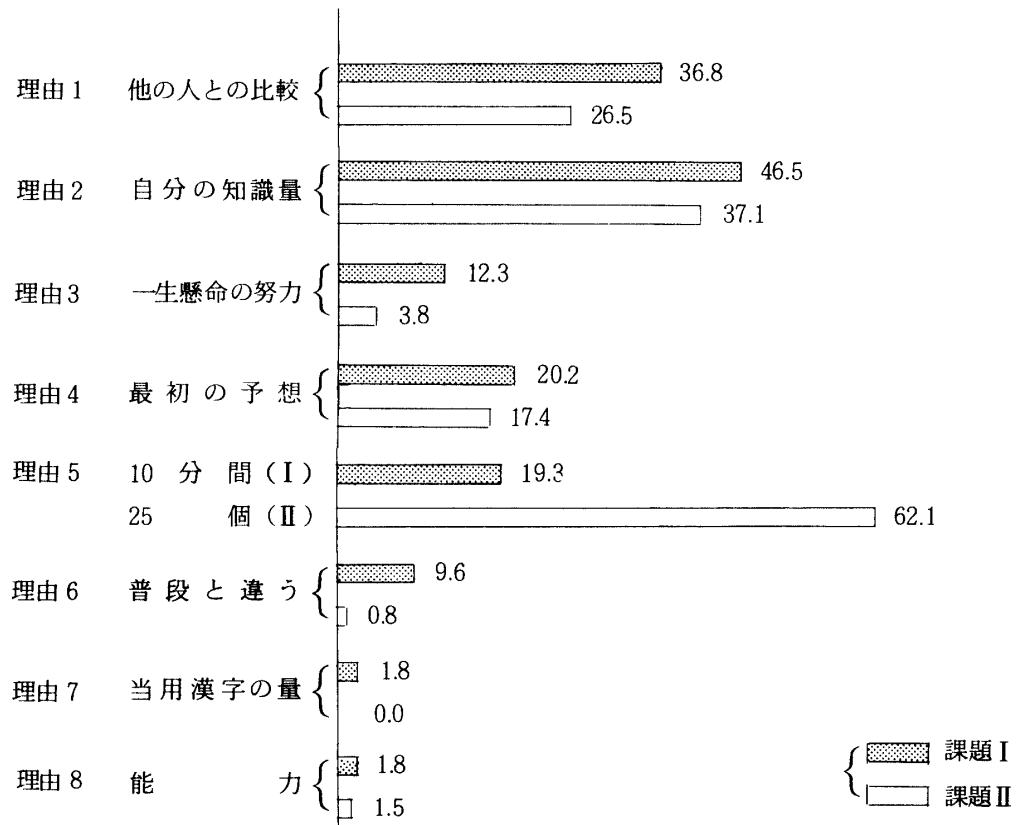


図 1 両課題における自己評価の判断理由の選択割合 (数値は%)

表 8 課題Ⅰの自己評価点別選択理由の割合 () 内%

| 自己評価点 | 理由 | 他の人との比較 | 自分の知識量 | 一生懸命の努力 | 最初の自分の予想 | 10分間の範囲 | その他 |
|------------|----|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 (n= 28) | | 13 (46.4) | 15 (53.6) | 2 (7.1) | 4 (14.3) | 7 (25.0) | 3 (10.7) |
| 2 (n= 61) | | 23 (37.7) | 26 (42.6) | 5 (8.2) | 12 (19.7) | 14 (23.0) | 12 (19.7) |
| 3 (n= 19) | | 6 (31.6) | 7 (36.8) | 4 (21.1) | 5 (26.3) | 1 (5.3) | |
| 4 (n= 6) | | 0 | 5 (83.3) | 3 (50.0) | 2 (3.3) | 0 | |
| 全体 (n=114) | | 42 (36.8) | 53 (46.5) | 14 (12.3) | 23 (20.2) | 22 (19.3) | 15 (13.2) |

表 9 課題Ⅱの自己評価点別選択理由の割合 () 内%

| 自己評価点 | 理由 | 他の人との比較 | 自分の知識量 | 一生懸命の努力 | 最初の自分の予想 | 25個と比較 | その他 |
|------------|----|-----------|-----------|----------|-----------|-----------|----------|
| 1 (n= 27) | | 10 (37.0) | 9 (33.3) | 1 (3.7) | 5 (18.5) | 18 (66.7) | 1 (3.7) |
| 2 (n= 73) | | 19 (26.0) | 28 (38.4) | 1 (1.4) | 10 (13.7) | 49 (67.1) | 2 (2.7) |
| 3 (n= 22) | | 6 (27.3) | 9 (40.9) | 3 (13.6) | 4 (18.2) | 11 (50.0) | 0 |
| 4 (n= 8) | | 0 | 3 (32.5) | 0 | 2 (25.0) | 4 (50.0) | 0 |
| 5 (n= 2) | | 0 | 0 | 0 | 2 (100.0) | 0 | 0 |
| 全体 (n=132) | | 35 (26.5) | 49 (37.1) | 5 (3.8) | 23 (17.4) | 82 (62.1) | 3 (2.3) |

ので 36.8%である。この2つの理由を同時に選択している者の割合は全体の10%と少ない。さらに、課題Ⅰのみの選択肢である「10分間の範囲」を理由にあげている者も少ない。これらのことから、課題Ⅰでは、自己評価の設定理由として、自己の能力(知識量)に基準を求める者と、あるいは反対に、他者との比較に依存する者とに大きく分けられる。

課題Ⅱをみると、最も選択が多いのは、「25個と比較して」というもので、全体の 62.1%の者が選んでいる。また、「他の人との比較」を選択している割合も 26.5%と多い。これは、自己評価基準の設定は、外的な基準に依存していることを示すものである。また、二番目に多いのは、「自分の知識量」から判断するというもので 37.1%となっている。

課題Ⅰと課題Ⅱを比較すると、客観的な基準が明確な課題Ⅱでは、やはりこの基準に依存する割合が高い。客観的基準が曖昧な場合には、自分の知識量を基準にするか、あるいは、他者の得点を予想しそれと比較するか、によって自己評価基準を設定する人が多い。

(2) 自己評価点別の設定理由について

課題Ⅰにおける自己評価点別の選択理由の割合を表8に示す。すべての自己評価点において「自分の知識量」をあげる割合が高くなっている。次いで「他の人との比較」が多くなっているが、評価点が上がるにつれて、「一生懸命の努力」、「最初の自分の予想」といった理由が多

く、自分自身の内部基準に依るものが多い。反対に、自己評価点が低い者ほど、「他の人との比較」、「10分間でできる量」といった外的な基準に依るものが多くなっている。

課題Ⅱの自己評価点別選択理由の割合を表9に示す。評価点5点をのぞいて、すべての評価点で、「25個のうちいくつできたか」を選択している割合が高く、明確な外的基準に依存している。しかし、評価点が上がるにつれて、「自分の知識量」、「最初の自分の予想」といった割合がふえている。とくに、評価点5点の者は2名とも自分の最初の予想を基準としており、自己の要因に依る基準設定を行なっている。

IV 考 察

1. 課題による条件間の差異

まず、自己評価の程度についてみると、課題による相違はみられない。したがって、解答数についての客観的な基準が明確か曖昧かは、自己評価の高さには、あまり影響しないといえる。また、全体的に自己評価は低く、「あまりできなかった」とする人が多い。これは、一般的に、自己評価を行なう場合には全体的に低く評価することが予想されるが、本研究でもこの傾向がみられたのではないかと考えられる。ただ、課題Ⅱをみると、自己評価点が3点の者の平均解答率は56%で、客観的基準からみると、やや困難な課題であるともいえよう。

解答数については、全般的には、課題による差はほとんどみられない。しかし、自己評価点別にみると、課題 I では課題 II に比べて、解答数が多いにもかかわらず自己評価が低い場合（自己評価点 1 点の者）と、反対に、課題 II に比べて解答数が少なくとも自己評価が高い場合（自己評価点 3 点以上）とがあることが示されている。これは、課題 I では、解答数についての客観的な基準が不明確なために、実際の解答数が直接的に自己評価の高さに影響する度合いが小さいためであるといえる。加えて、自己評価点と解答数との相関結果をみると、課題 I では .23、課題 II では .61 となっている。このことから、課題 II では、自分の実際の解答数が自己評価の高さに影響しているが、課題 I では、それに比べて影響は少なくなっていることがわかる。したがって、客観的な基準が曖昧な課題でも、解答数が多いほど自己評価も高くなる傾向はみられるが、基準が明確な課題ほど顕著ではない。すなわち、課題の基準の明確さによって、実際の解答数が自己評価に及ぼす影響が異なるといえる。

次に、他者の得点をどの程度であると予想しているかについてみると、全体的には客観的な基準が明確な課題 II の方が低く予想している。実際の解答数との差得点を見ると、課題 I では、すべての自己評価において、他者の得点が高いと予想している。「まあまあできた」と自己評価している者でも、わずかではあるが、他者の得点の方が高いと予想している。これに比べて、課題 II では、自己評価が「ふつう」以上のものは、自分の解答数より低く予想している。この課題による相違は、明らかに自己評価の手がかりとして他者の成績を用いているかどうかによるものであろう。

ところで、自己評価点と他者の得点予想点との相関をみると、課題 I では負の高い相関がみられる ($-.31$) が、課題 II では負の相関ではあるが有意ではない ($-.12$)。これは、課題 I では、自己評価が低い者ほど他者の得点を高く予想していることを示しており、課題 II のように他者の得点についての手がかりが明確に設定されていないために、自己評価に応じた予想ができなかったものと考えられる。

このように、課題 I と II とでは、実際の自分の解答数、さらに他者の得点予想が、自己評価の高さに影響していると考えられる程度が異なっている。解答についての客観的な基準が曖昧で不明確な課題では、実際の解答数や他者の得点予想が直接的に自己評価に影響する程度は、客観的な基準が明確に設定されている課題に比べて、少ないといえるであろう。

2. 自己評価基準の設定

自己評価が、具体的にどのような判断理由によってなされているかについて考察する。先の結果から、客観的な基準が曖昧な課題 I においては、自己評価の基準設定に際して、何らかの外的な要因に依るものと、自己の内的な要因に依るものとに分かれることが示されている。とくに、自己評価の高い者ほど自分の知識量（能力）、努力といったもの、さらに要求水準や目標に依存する割合が高い。反対に、自己評価の低い者は、他者の得点の予想点、解答時間といった外的な基準を用いているといえる。したがって、このような課題においては、自己評価の程度によって、用いられる基準が異なってくるといえる。このことは、自己評価の低い者ほど解答数が少なく、個々人の能力水準によって用いる基準が異なるとも考えられる。本研究では、この視点からの分析を行っていないが、この点についてのさらなる検討が必要である。

次に、解答についての客観的な基準が明確な課題 II の場合には、先にも述べたように、外的な手がかりを用いることが多かった。このことは、設定理由についての結果からも示されている。しかし、自己評価が高い者ほど自己の内的な要因に基準を求める場合が多くなっている。「よくできた」と自己評価した者（2 名）の解答数は、20 点前後で、約 80% の解答率である。この 2 名とも、自己評価基準の設定理由として、自分の要求水準、目標といったことをあげており、能力水準の高い者は、客観的な基準を直接的に用いることが少ないといえるだろう。

以上のように、課題の性質によって、自己評価が行なわれる際の基準設定に用いられる手がかりが異なることが明らかに示された。さらに、課題内でも、自己評価の高さによって、用いられる基準が異なることも示唆されている。

V 討 論

本研究は、自己評価を行なう際にどのような基準、手がかりが用いられるか、さらに、課題の性質によって自己評価がどのように異なるかについて検討したものである。課題として、客観的な基準が明確なもの（解答数、解答時間を限定した課題）、客観的な基準が不明確なもの（解答数を限定せず、時間のみを制限した課題）の 2 種を用いた。

その結果、自己評価と実際の解答数、他者の得点予想に関して、課題による差異がみられた。また、自己評価の基準設定の仕方も異なることが明らかとなった。すなわち、客観的な基準が明確な課題では、実際の解答数に応じた自己評価が行なわれるが、不明確な課題では、そ

れほど顕著な対応はみられない。さらに、他者の得点を予想する場合にも、不明確な課題では、自己評価の高さに関係なく、自分の解答数よりも他者の得点を高く予想する傾向がみられた。

解答数について客観的な基準が予め設定されているような課題では、具体的な自己評価基準の設定理由をみても、客観的な基準に依る場合が非常に多くなっている。したがって、このような課題においては、客観的な基準をもとに自己評価がなされ、他者の得点予想もそれに応じたものになると言える。しかし、自己評価が高い者では、自分の要求水準、目標といった自分なりの基準を設定していることも示されており、個人の能力水準との関連性が示唆される。

一方、解答数についての客観的な基準が不明確な場合には、それぞれの個々人の基準によって自己評価がなされることが多く、その評価は全般的に過少評価になる傾向がみられるといえる。具体的な基準設定の理由をみると、自己評価の高いものほど、自分の知識量、努力、目標といった自己の要因に依存することが多いが、自己評価が低い者ほど、他者の予想点とか解答時間といった外的な基準を求める傾向がみられる。

以上のように、解答数についての客観的な基準が明確か不明確かによって、明らかに自己評価の基準として用いられる手がかりは異なっているといえる。しかし、ここで、個人の能力水準の要因を考慮する必要がある。すなわち、課題に対する個人の能力が高い場合には、客観的な基準の明確さにかかわらず、自己評価の基準は、自己の内的な要因（知識量、過去の成功、失敗経験など）によって設定されることが多く、能力が低い場合には、外的な手がかり（客観的な基準、あるいは他者の得点予想など）を求める傾向が強く、とくに、客観的な基準が予め明確に設定されている場合には、それに依存することが多くなることが示唆される。すなわち、外的な客観的な

基準の有・無、さらに個々人の能力水準によって自己評価の設定基準が異なるといえる。このことは、課題の性質と個人の能力要因との交互作用を予想したものであるが、本研究ではこの点については十分考慮しておらず、今後、より詳細な研究が必要である。

文 献

- Bandura, A. 1977 Social learning theory; 原野監訳 社会的学習理論, 金子書房。
- Kanfer, F. H. 1971 The maintenance of behavior by self-generated stimuli and reinforcement. In Jacobs & Saxe (Eds.), *The Psychology of Private Events*, 39-59, New York Academic Press.
- Marston A. R. 1964 (b) Variables affecting incidence of self-reinforcement. *Psychological Reports*, 14, 879-884.
- Masters, J. C. & Pisarowicz, P. A. 1975 Self-reinforcement and generosity following two types of altruistic behavior. *Child Development*, 46, 313-318.
- Molho, A. I. 1973 Effects of task type and difficulty level on rates of self-reinforcement in children. *Dissertation Abstracts International*, 34, 3-B, 1279.
- Read, J. M. 1973 Methodological consideration in self-reinforcement. *Dissertation Abstracts International*, 34, 6-B, 2908.
- 塩田勢津子 1980 自己強化および自己評価の学習促進成立に及ぼす効果 日本心理学会44回大会発表論文集, 261.

(1981年7月31日 受稿)

ROLE OF SELF-EVALUATION IN SELF-REGULATION SYSTEM (I)

On the criterion-setting in self-evaluation

Setsuko Ishida

Recently, self-reinforcement has been introduced as a central concept for studying independent learning. Many studies report that self-reinforcement has a motivational effect on learning and maintains the response frequency.

Then, self-reinforcement is considered as a component of self-regulation system. This system consists of three processes: self-monitoring, self-evaluation, and self-reinforcement. It has suggested that the most important, yet least researched, component of this system is self-evaluation.

The present study is designed to clarify the process of criterion-setting in self-evaluation, and to examine the effect of task on it.

The 246 female undergraduates are divided into two task conditions. These tasks are different in the external criterion on the number of answers.

Task I: Ss are asked to write Chinese characters with the sound "shin" as best they can within ten minutes.

Task II: Ss are asked to write 25 kinds of Chinese characters with the sound "shin" within ten minutes.

After this session, all Ss are asked to evaluate their performance on a 5-points scale (SE score), and to state the reason for judgement of their SE responses. Additionally, they are said to estimate others' performance of the same task.

Main results are as follows:

- 1) There were no differences in SE score between task conditions.
- 2) SE scores have a close relation to the number of answers (task performance) in Task II.
- 3) In Task I, Ss set their criteria based on their internal factors such as their own knowledge of Chinese characters. On the other hand, in Task II, Ss tend to set their criteria with the external factors such as the number 25 or their estimated performance of others.

These results indicate that the criterion of self-evaluation is different for task type.